ラジオが泣いた夜

片岡義男

角川文庫 4523

ラジオが泣いた夜

片岡義男

角川文庫 4523

昭和五十五年二月二十日　初版発行
昭和五十五年五月三十日　三版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——厚徳社　製本所——大谷製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-137107-0946(o)

ラジオが泣いた夜

片岡義男

角川文庫 4523

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

至近距離　五
ラジオが泣いた夜　四五
白い町　六九
夜行ならブルースが聴こえる　九五
明日(あす)が来るわけない　一三三
ハッピー・エンディング　一六七
高原のティー・タイム　二〇三
心をこめてカボチャ畑にすわる　二三五
俺(おれ)を起こして、さよならと言った　二七三
きみは、何なの？　三三三

都筑道夫
片岡義男

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

至近距離

1

アメリカ軍のナンバー・プレートをつけた、濃いカーキー色のダッジ・モナコが、走ってきた。この南の島の、夏の強烈な陽ざしを白く照りかえす道路をいま走っているのは、その車だけだった。

ダッジ・モナコは、トンネルに近づいた。左のウインカーをオレンジ色に点滅させ、左に寄った。そして、トンネルの手前で、とまった。

助手席のドアが開いた。皮の旅行カバンが、道路に降ろされた。

ドアに手をかけ、右脚を車の外に出したアロハ・シャツの日本人青年は、肩ごしにふりかえり運転席の男を見た。熱帯地用の略装軍服を着た、若いアメリカ兵だった。

「乗せてくれてありがとう」

アロハ・シャツの青年が英語で言い、微笑した。

「いつだって、よろこんで乗せてあげる」

「アメリカの車には、いつも楽をさせてもらってるよ」

彼の言葉に、若い米兵は笑った。

「ずっとこの島で育ったけれど、乗り合いバスなんか乗ったことがないもの」

道路に置いた旅行カバンを右脚でむこうへ押しやり、青年は車を降りた。
「ありがとう、運ちゃん」
彼はドアをしめた。
発進したダッジ・モナコは、トンネルの前でUターンをした。全長五メートルをゆうにこえるその車を、彼は道路に立ったまま見送った。走り去りながら、運転席の米兵は手を振ってよこした。
彼は旅行カバンを持ちあげ、トンネルにむかって歩いた。
外の強い陽ざしにくらべ、トンネルのなかはひんやりと涼しかった。わずかに右へカーブしているそのトンネルのまんなかまでくると、むこうの景色が丸く切りとられて見えた。白い道路に、陽炎がゆれていた。
この島は、ひょうたんを長くひきのばしたようなかたちだ。島の東側のほぼ中央に、民間の空港とアメリカ軍の空港が、ならんで位置している。
空港から海ぞいに南下すると、このトンネルがある。島の中心を背骨のようにのびる山脈から、東へ張り出した尾根をぶちぬくトンネルだ。
トンネルは、島を北と南に二分する位置にある。島の北半分は、空港をのぞいて、全域がアメリカ軍基地だ。島民は立ち入りを禁止されている。島の北側を自動車で一周することすら、許されてはいない。

トンネルの南側には、港のある湾が広がり、その湾をかこむようにしてこの島の町がある。陽ざしのなかに出た彼は、町にむかう道路をしばらく歩いてから、西へ直角に曲がった。

まっすぐいくと、アメリカ兵相手の歓楽街がある。山裾のおだやかなスロープにかこまれた樹の一本もない平原を、幅の広い道路が無愛想に碁盤の目にきざんでいる。

白い石造りの、平たい建物が、道路の両側にならんでいる。褐色の原野と黒いアスファルト舗装の道路、そして白い四角な建物が、昼間の残酷なほどに強い陽ざしのなかで、異郷の廃墟のようだ。夜になると、建物のそれぞれに、原色のネオンが灯る。

アロハ・シャツに、はき古したブルージーンズ、そして洗ったばかりの白いスニーカー。陽焼けした体は青年らしく無駄な肉に無縁で、身のこなしは軽やかに精悍だ。

人も自動車もとおらない幅の広い道路を、彼はゆっくり斜めに渡った。そして、一軒の白い建物の端にある黒いドアを押し、なかに入った。建物の屋根の幅いっぱいに、ネオン管が店名をうたっていた。粒よりのホステスで有名な店だ。

地下への階段を、彼は降りた。店は地下なのだ。地上は、いまは使用されていない倉庫と、不動産屋の事務所になっている。

なめし革を張った大きなドアを入ると、店のなかだ。店名は『涙のチャペル』という。店内には、冷房がうっすらときいていた。

「おや。おかえりなさい」

誰もいないように思える店の奥から、女性の声がした。玉突きの音が、その声に重なった。カウンターのそばにカバンを置き、彼は店の奥へ歩いた。縦に長い店だ。右側にカウンター、左はボックス席だ。あいだの通路みたいなフロアには、直径一〇センチほどの黒く塗った鉄管が、天井からフロアまで、垂直に何本も立っている。

殴り合いの乱闘がおこるのを防ぐため、この店の初代の店主が、このような造りにしたのだ。こう何本も鉄管が立っていては、殴り合いはできない。しかし、異様な雰囲気だ。常連の米兵たちは、この店を、「鳥かご」とか「檻」と呼んでいる。

鉄管が林立するむこうに、ローテーションの玉突き台を三台置いたスペースがあった。まんなかの台の明かりをつけ、店主のジェーンが玉を突いていた。ジェーンは、三十歳のなかばにはそろそろ手が届く。日本女性だが、誰もが彼女のことをジェーンと呼んでいる。

陽焼けした体に、ショート・パンツとTシャツ。白いハイヒール・サンダル。化粧はせず、光線の具合いによっては銀色にも見えるピンクの口紅だけを、いつも唇に厚く塗っている。

台にかがみこみ、ジェーンはキューを構えて玉を狙った。クッションをあちこち使って玉をひっぱりまわしすぎだが、狙った玉は正確にポケットに落とした。

顔をあげ、ジェーンは微笑した。不敵で鉄火なきらめきが、唇の端にうかんだ。魅力的な微笑だった。

「おかえり、ヨシアキ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジェーンは、まっすぐ、ヨシアキの目を見た。そして、おだやかに、
「ヒロ子のこと、聞いた？」
と、言った。
「聞いてない」
「強姦されたのよ」
「誰に」
「アメリカ兵にきまってるじゃないの」
「犯人は？」
「あがるわけない。警察に届けてもいない。馬鹿ばかしいから」
「ちきしょうめ」
「そうよ、ちきしょうよ」
「ヒロ子は？」
「病院」
「ひどいのか」
「左の太腿と、肋骨を三本、折ってる。頭も打ったらしいし」
ヨシアキは、この店で客の米兵たちに生演奏の音楽を提供しているバンドの、リーダーだ。そして、ヒロ子は、音楽に合わせて踊るヌード・ダンサー。

「ちきしょう」
ジェーンは再び台にかがみこみ、玉を突いた。
ヨシアキは、カウンターのむこうの端まで歩いた。奥の洋酒棚に、ヒロ子のカラー写真が額に入れて立てかけてあった。
ヒロ子が、ブルーの海から白い砂浜へあがってくる写真だ。身につけていてもいなくても大差ないようなビキニをとってしまって片手に丸めて持ち、濡れた裸の全身が強い陽ざしに光っていた。素晴らしい体だ。
ヨシアキは、バッグを持ちあげた。店の奥をふりかえり、
「五時には帰ってくる」
と、ジェーンに言った。

2

ヒロ子が好んでいく海岸は、絵に描いた三日月のようなかたちだ。砂浜のまんなかに、椰子の樹が一本だけ、立っている。
払い下げのジープにテーブルつきのパラソルとデッキ・チェアを積み、ヒロ子は、たいていひとりで、この砂浜へいく。
美しく澄んだ、文字どおり遠浅の海で泳ぎ、肌を陽に焼く。陽に当たりすぎたら、パラソルの

影に入ってデッキ・チェアに体をのばし、海や空をながめつつ、氷を浮かべたライム・ジュースを飲む。

強姦された日も、ヒロ子はこの砂浜に来ていた。

やさしい陽影で風に全身を愛撫させつつ、いい気持でいたとき、砂浜のうしろの林のむこうに、トラックの音を聞いた。アメリカ軍の軍用トラックの音だった。

トラックは、走り去ったようにも思えた。とまったようにも思えた。はっきりしない。そのトラックのことを気にしなければならない理由など、そのときのヒロ子には、まったくなかったのだ。

パラソルの影を出て、海でひと泳ぎした彼女が砂浜にあがってくると、林のなかからふたりの男が走り出てきた。アメリカ兵だった。

ヒロ子にとびかかったふたりの男は、抵抗する彼女を軽々と抱きあげ、大きな掌で口をふさぎ、林のなかへひきずりこんだ。

林のむこうへ出て、待っていた幌つきの軍用トラックの荷台に、男たちはヒロ子をほうりあげた。荷台にひそんでいたべつの男が、ヒロ子を押えつけた。

トラックは、走りはじめた。幌を降ろした荷台は、熱くて暗かった。その荷台で、三人の男が、交互にヒロ子を犯した。三人が一度ずつではなく、何度も。

トラックは、ほとんどいつも、走りどおしだった。

犯されつくしたヒロ子は、走るトラックの荷台から、外の地面にほうり出された。ヒロ子が連れ去られた海岸ちかくの、林のほとりだった。

病院に見舞いに来たヨシアキに、ヒロ子は、自分が強姦されたときの状況を、ざっと以上のように語った。

「相手は誰だかわからないのか」

ときくヨシアキに、ヒロ子は首を振った。

「林のなかから走って出てきたとき、ふたりの男はナイロンのストッキングをかむってたから」

ヒロ子を犯すとき、男たちは、おたがいにほとんど口をきかなかったという。

「手がかりは、なにもないのか」

「あのね、イレズミ」

と、ヒロ子が言った。それまでほかの誰にも語らずにおいたことだ。

「イレズミ？」

「私を林のなかにひっぱりこんだとき、男たちのひとりが、腕にイレズミをしてるのを見たの。バラの花のイレズミ。右の、二の腕の、まんなか」

ヒロ子は、微笑した。

「赤くて、かわいらしいイレズミ。花は、ふたつなの。ひとつは赤く塗りつぶしてあり、もう

ひとつは輪郭だけ」

米兵の腕に、こんなイレズミをよく見る。町のタトゥー・パーラーで、電気針で簡単に彫ってもらえる図柄だ。毛むくじゃらの太い腕に、このイレズミをごく最近、ヨシアキはしばしば見たような気がする。どこで見ただろう。もうちょっとでよみがえる記憶が、出口にひっかかったまま、こちらへ出てこない。もどかしく思えば思うほど、記憶に手が届かない。

夕方の五時にヨシアキが店に帰ると、バンドのメンバー五名が、すでに来ていた。サム。タケ。カメ。ジロー。ジェームズ。この五人。全員、ヨシアキとおなじ島育ちだ。

奥の玉突き台では、ヒロ子の代役だというポリネシア系の妖艶な美人が、ジェーンを相手に玉を突いていた。

カウンターの端に集まった五人に、イレズミのことを、ヨシアキは伝えなおした。

「俺も、そのイレズミを、この店で何度か見てるような気がする。たしかに」

「よくあるけどな、小さなバラの花は」

「おい、あいつ」

と、ジェームズが、指を鳴らした。

「なんとかビッチ。あの軍曹」

ジェームズのその言葉に、出口まで来てひっかかっていた記憶が、ころりとヨシアキの掌に落ちた。

「ギャロビッチ！」
「そうだ」
「むっくりした、肥満タイプの、馬鹿アメリカ」
「ホステスに、やらせろ、やらせろと言う奴だ」
「あの野郎め、ちきしょう」
と、ヨシアキが言った。
「ただじゃおかない」
「そういえば、このところ、顔を見ねえな」
洋酒棚にあるヒロ子の写真を、ヨシアキは見た。彼がはじめてヒロ子に抱いてもらえたのは、彼女がまだこんなに深く陽焼けしてはいないころだった。
店が休みの月曜日の夕方、ヨシアキが住んでいるアパートの窓の下へ、ヒロ子がジープで来て、ホーンを鳴らし、ヨシアキ！　と、呼んだ。
外に出てみると、運転席のヒロ子は、全身まっ赤に陽焼けしていた。一日じゅう、砂浜で陽のなかに出ていたのだという。ひどい陽焼けだった。
手当てが必要だ、とヨシアキは言った。大げさではなく、ほんとうに、そう思った。ヒロ子にかわってジープを運転し、彼女のアパートへいった。
冷たいシャワーを彼女に浴びさせ、あがってきたところで、ベッドに裸で横たわらせた。こま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com